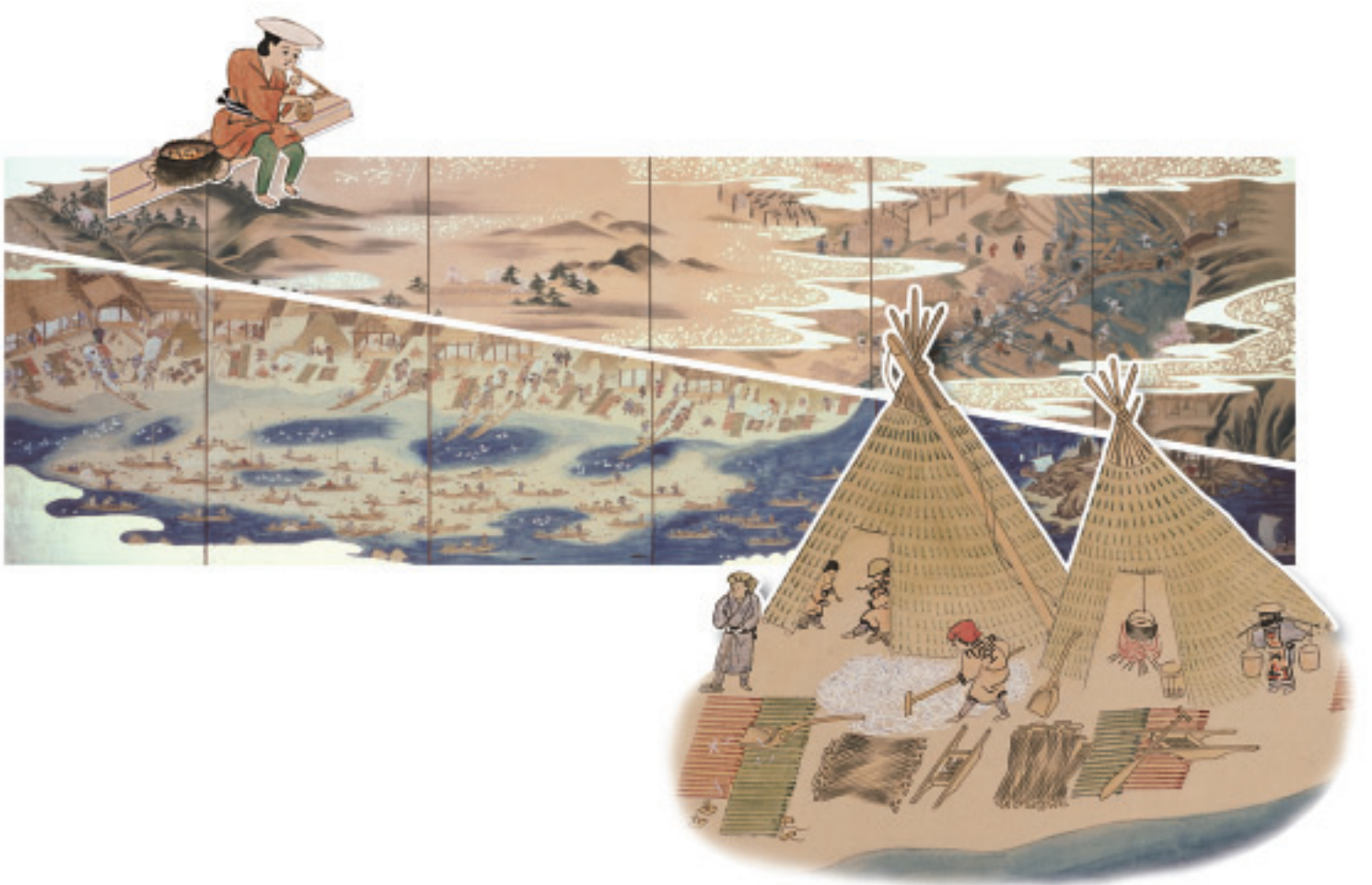


江差檜山の人びとの 生活と生業



江差檜山屏風

【作品解説】

函館市立中央図書館の所蔵になる『江差檜山屏風』は、(乾)「上ノ国材木流之図」(坤)「江指浜鯨之図」からなる6折1双の4尺屏風絵である。前者は江差陪山(檜山)、すなわち目名山、厚沢部畑内(羽板内)から厚沢部川に散流した伐木を鳶竿で筏下組みしている河口土場と河口近辺前浜での鯨加工の一部、江差寄りの田沢村近辺の漁村(『新撰北海道史』第2巻通説1〈北海道1937年p160～161〉の挿入図解説では「上ノ国見の淋しい漁村」と説明されている)の情景や河口近辺の前浜での鯨潰し(鯨の内臓を身から選り分ける作業)の様子の一部が活描され、主に檜山伐採の活況が伝わってくる絵図である。後者(坤)の屏風は最近、高校生用の各社教科書『日本史B』の表紙や挿絵に採用されている馴染み深い屏風絵であり、江差前浜における近世の鯨刺網漁の様子と、漁業後の鯨加工の手順が、またそれに関係する商家、役所、町場も、商都江差町の特色を示すべく描かれている。その一方で、(乾)「上ノ国材木流之図」は近年の林業史研究の不振もあってか、一般にはあまり知られていない。

江差湊は松前藩が蝦夷地のアイヌとの交易や蝦夷地への人々の出入りを規制した松前、箱館ともに道南三湊を構成するひとつであった。近世の北海道は農業が未発達(1)の「五穀は不生の地」であり、17、18世紀の林業、18世紀からの鯨漁の発展を受けて江差湊は材木積出湊として、鯨漁の盛地として隆盛した。とくに鯨漁の繁華ぶりは「江差の五月は江戸にもない」といわれるほどであった。「江指浜鯨之図」にはその鯨漁とそれに関係する人びとの躍動感溢れる様子が、江差浜を取り巻く町の情景が精緻に描かれている。柿葺き屋根の蔵や丸小屋の情景、南蛮売り、賑やかな鯨漁と鯨加工やその運搬などの様子が窺える。

鯨は年貢や食料、肥料(干鯨、メ粕)となり、本州各地に販売された。菅江真澄(2)がいうように、それは松前蝦夷地という「此島のいのち」であった。図

絵には鯨製品を扱う問屋ともども津鼻町や蔵町から九艘川町にかけての江差前浜、約1kmの情景が描かれている。

ところでこの屏風絵は、前掲『新撰北海道史』第2巻通説1(p160～161の挿入図、p181)ではモノクロ写真で「江差屏風」と「檜山土場之図」の名称で掲載され、『江差町史』第5巻通説1(江差町1982年)の扉裏ではカラー写真の『江差檜山屏風』が「江差屏風とヒノキ山屏風」名で掲載されている。ただ前者では、「檜山土場之図」に描かれている河口付近海岸の鯨加工と江差より田沢近辺の漁村の情景が省略されて掲載されており、全てではない。

この屏風絵は刺網時代の鯨漁業と江差陪山(雑木)の間に檜が混在繁茂しているのを飛木といい、これがある山をいう(3)の伐採・流送の様子を知りえる非常に珍しく、かつ詳細な絵図である。だが、残念ながら模写図である。これは函館市立中央図書館の故岡田健三館長(1945年物故)が戦前、絵師に模写させた図絵であり、現在、模写年も模写絵師名さえも記録がなく、不明である。しかも原屏風さえも行方不明である。原絵図の作者・作成年代・現所蔵者も不明である。そうした難点を有する絵図ではあるが、この模写屏風が唯一の存在であり、かつ先にも述べたように『高校の日本史』の教科書にも取り上げられ、近世中期の鯨漁業の隆盛を視覚的に理解するうえで、他の追従を許さない格好の絵図であると判断されるからである。ただ、昭和12年出版の『新撰北海道史』の掲載モノクロ写真からは編纂過程で原絵図写真を撮ったと考えられ、そうすると少なくとも昭和10年頃までは所在が明らかであったことになるが、編纂終了後、その掲載の焼付け写真もネガも、多くの史資料を受け継いで設立された北海道立文書館にもなく、所在不明となっている。

この屏風絵の来歴と作者、描かれた年代などについては、前掲の『新撰北海道史』や『江差町史』の記述、五十嵐聡美『アイヌ絵巻探訪』(北海道新聞

社 2003年)の考証から宝暦年間(1751～63年)に活躍したといわれる風俗画家、小玉貞良の可能性⁽⁴⁾があること、それに村落を越えた入会漁業地である近世の松前地の西部で鯉漁が盛んになったのが宝暦期(1751～63)以降であること、豊凶が激しい鯉漁が安永～文化期(1772～1817年)に薄漁・凶漁にたびたび直面した事実、さらに江差の後背地の江差・厚沢部・目名の諸檜山のうち、屏風絵に描かれた厚沢部陪山(檜山)が延宝6年(1678)に伐採が漸次許可され、宝暦8年から明和7年(1758～70)にかけて全て留山になり、また文化期(1804～17)に厚沢部川が鮭の運上漁場となり、下流域に集落が形成され、材木の管流しが以前よりは容易でなくなったことなどから、屏風絵は宝暦8年以前、すなわち宝暦前期の作品と考えてよいのではないかと、以前には推測しておいた(『屏風絵を読むにあたって』『人類文化研究のための非文字資料の体系化 ニューズレターNo.11』2006.3)。

しかし、厚沢部山の留山は明和7年(1770)であり、この年をもって江差の「御山七山」、すなわち

上ノ国目名山、戸渡(榎)川山、古櫃山、豊部内山、田沢山、厚沢部目名山、厚沢部畑内(羽板内)山の全山の留山制が施行されたことから、木材の伐採・管流し(筏流し)は明和7年以前ということになる。ちなみに、藩による厚沢部羽板内(畑内山)檜山の伐採許可は延宝6年(1678)年であり、宝暦8年(1758)豊部内山から漸次留山の制が実施された⁽⁵⁾。

これらの事実を勘案すると、屏風絵は明和7年以前の初期の状況を描いたものと考えるのが妥当であろう。少なくとも宝暦年間ではないことは確かである。そうなると、宝暦年間に活躍・死去したと推測されている小玉貞良の作品ではないことになる。だが、貞良は工房をもっていたといわれるので、弟子たちが貞良の意志をついで、共同作業で仕上げたとも考えうる。しかし、現時点で貞良作ではないと完全に否定してしまうことも躊躇を覚える。

ちなみに、江差前浜に建網が許可・導入されたのは慶応2年(1865)のこと(前掲『江差町史』482頁)で、それまでは刺網のみしか公許されていなかった。絵図は刺網漁のみの情景描写である。

【注】

- (1) 古川古松軒『東遊雑記』東洋文庫27 平凡社 1964年 p.116。
- (2) 「蝦夷喧辞辯」『菅江真澄全集』第2巻 未来社 1971年 p.20。
- (3) 『江差町史』第5巻通説1 江差町 1982年 p.216。
- (4) 越崎宗一『アイヌ絵』参考 1976年 北海道出版企画センター。
- (5) 前掲『江差町史』第5巻 p.216、p.223、p.383。